



Title	当事者主体のソーシャルワーク支援におけるグループ・ダイナミックス
Author(s)	寶田, 玲子
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/101611
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (賀田 玲子)	
論文題名	当事者主体のソーシャルワーク支援におけるグループ・ダイナミックス

論文内容の要旨

本研究では、日本で暮らす外国人の当事者主体のソーシャルワーク支援のあり方について志向することを目的に、当事者と支援者との関係性において異なるニーズが混在することで生成する支援ニーズの〈ずれ〉をどのようにとらえ、当事者主体の支援に展開できるかを考察する。本稿では、当事者と支援者がともに確認した「当初のニーズ」と、かかわりから見出された「もう一つのニーズ」が互いに異質なまま混在している状態、すなわち支援ニーズの〈ずれ〉が生成する状態が、当事者と支援者の関係性が問われる場面だととらえている。そこで、まず、ソーシャルワークとグループ・ダイナミックスにおけるニーズへの対応についてそれぞれ整理したうえで、地域で暮らすブラジルを中心とする外国人への支援活動の事例をもとに、当事者主体のソーシャルワーク支援のあり方について、グループ・ダイナミックスのアプローチを中心とした実践的研究を展開する。

第1章「本研究の問題」では、日本で暮らす外国人に対する具体的な支援ニーズについて先行研究を紹介しながら、外国人支援において支援者側からみた支援ニーズと、当事者の目線でみた支援ニーズの両方が存在することを指摘した。そこから、支援ニーズへの具体的な対応について、ソーシャルワークとグループ・ダイナミックス、それぞれのアプローチから整理を行った。そのうえで、複数のニーズが異質なまま混在し、支援ニーズの〈ずれ〉が生成する場面において、複数の異なる活動が共存するそのあり様に着目した村上靖彦の(2021a)の「生のポリリズム」の概念を援用しながら議論の展開を試みた。

第2章「支援活動開始までのエスノグラフィー～ブラジル人当事者の支援ニーズが生成するまで」では、まず、本研究のフィールドである愛知県半田市について概観し、筆者がブラジル人のコミュニティでフィールドワークを行うに至った経緯を述べた。次に、外国人の支援ニーズに応える活動を展開するまでの当事者と支援者との関係性において、当事者の支援ニーズがどのように出現するのかを明らかにし、当事者の支援ニーズへの対応について、ソーシャルワークとグループ・ダイナミックスそれぞれのアプローチから議論した。

第3章「支援活動開始後のエスノグラフィー～ブラジル人当事者と支援者のかかわりから生成する支援ニーズ」では、2017年10月のシランダの日本語教室の活動が開始されてから、2024年2月に至るまでの支援活動開始後の協働的実践をエスノグラフィーにまとめた。ここでの協働的実践では、現場で当事者と支援者双方で生活課題に対する「当初のニーズ」を確認し、それに合わせた支援が実施されても、かかわりを通してあとから「もう一つのニーズ」が出現していくことが明らかとなった。そして、この「当初のニーズ」と「もう一つのニーズ」が混在することで、支援ニーズの〈ずれ〉が生成する場面が当事者と支援者の関係性が問われる「場」だととらえて、具体的にどのように関係性が変化していくのか検証した。

第4章「考察～ポリリズム論からみた支援ニーズの〈ずれ〉」では、これまでの協働的実践をふりかえりながら、支援ニーズの〈ずれ〉の解釈について、エスノグラフィーをもとにソーシャルワークとグループ・ダイナミックスそれぞれのアプローチから整理した。ここでは、ブラジル人当事者と支援者とのかかわりのなかで、当事者の「声」を反映した支援ニーズと、実際の支援ニーズとの

〈ずれ〉をどのように解釈すべきなのが問題の焦点であると考え、さらに、村上靖彦（2021a）の生のポリリズムの概念をもとに、生成する支援ニーズの〈ずれ〉について考察を行った。そこから明らかになったことは、異質な支援ニーズが混在することで〈ずれ〉が生成する一連のプロセスが、当事者と支援者の対話的な関係性を構築する「対話の場」につながるということであった。また、支援ニーズの〈ずれ〉が生成する「場」を、支援者側がどう活用するかによって、当事者主体の支援ニーズへの対応に影響を与えることを示唆した。

第5章「支援ニーズの〈ずれ〉に着目した新たなソーシャルワークの支援に向けて」では、支援ニーズの〈ずれ〉が生成することの重要性とその限界について言及し、さらに、当事者主体の支援ニーズへの展望を図るための新たなソーシャルワーク支援のあり方について検討を行った。ソーシャルワークの援助行動において、支援ニーズの〈ずれ〉は「適切な支援を行っていない」とみなされるため、支援ニーズの〈ずれ〉をソーシャルワークの視座から議論するには限界があることを論じた。一方、グループ・ダイナミックスでは、既存の規範が変化する様相を活用したり、異なる規範を受容し調整していくものとしてとらえられるため、これらの異質なニーズが混在することで、生成される支援ニーズの〈ずれ〉を解消すべきであるという判断が生じにくいことを述べた。さらに、ポリリズム論へと発展させて再考してみると、協働的実践を展開していくなかで、外国人当事者と支援者のかかわりの〈ずれ〉が、対話的関係が成立するうえで重要であることを指摘した。そのうえで、当事者の主体的な支援ニーズに支援者が応答していくためには、当事者と支援者のかかわりにおける〈ずれ〉は、必ずしも解消すべきものではなく、むしろ、複数の異質な声が響き合う「対話の場」としてのリズムが生成するうえで、なくてはならないものとして認識できた。そして、本論の最後に、グループ・ダイナミックスの視座から当事者主体のソーシャルワーク支援のあり方を志向することは、ソーシャルワークが大切にしている支援観への原点回帰に資することを指摘した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏名(寶田玲子)	
	(職) 氏名
論文審査担当者	主査 教授 渥美公秀
	副査 准教授 宮本匠
	副査 教授 澤村信英

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本で暮らす外国人に対する当事者主体のソーシャルワーク支援のあり方を検討することを目的とし、当事者と支援者との関係性において異なるニーズが混在することで生成する支援ニーズの「＜ずれ＞」をどのように捉えれば当事者主体の支援に展開できるかということについて、フィールドワークを通して考察したものである。具体的には、ブラジル人を中心とする外国人への支援活動の現場を事例とし、当事者と支援者がともに認知している「当初のニーズ」と、両者の関りから見出された「もう一つのニーズ」が互いに異質なまま混在している状態、すなわち支援ニーズの「＜ずれ＞」が生成する状況に注目し、ポリリズム論（村上、2021）の観点から理論的に分析し、従来のソーシャルワークに欠けていた「＜ずれ＞」の受容・活用について実践的な展望を得た。

第1章では、日本で暮らす外国人に対する具体的な支援ニーズについて先行研究を紹介しながら、支援者から見たニーズと、当事者から見たニーズが存在することを整理した。次に、支援ニーズへの対応について、ソーシャルワークとグループ・ダイナミックスそれぞれのアプローチを整理し、支援ニーズが複数あって「＜ずれ＞」が生じた場面への対処が異なることを示した。最後に、複数の異なる活動が併存する場面に関する理論的枠組みとしてポリリズム論の紹介を行った。

第2章では、本研究のフィールドである愛知県半田市にあるシランダの会とその活動について概観し、筆者がブラジル人のコミュニティでフィールドワークを行うに至った経緯を述べた。次に外国人の支援ニーズに応える活動を展開するまでの当事者と支援者との関係性において、当事者の支援ニーズがどのように出現するかを明らかにして、ソーシャルワークとグループ・ダイナミックスそれぞれのアプローチから議論した。

第3章では、2017年10月シランダの会の日本語教室の活動が開始されてから、2024年2月に至るまでの協働的実践をエスノグラフィーにまとめた。現場で当事者と支援者双方で生活課題に対する「当初のニーズ」が確認されてそれに応じた支援が実施されても、その過程で「もう一つのニーズ」が出現して、ニーズの「＜ずれ＞」が発生することが示された。

第4章では、支援ニーズの「＜ずれ＞」の解釈について、ポリリズム論を援用して解釈を試みた。その結果、異質な支援ニーズが混在して「＜ずれ＞」が生成する一連のプロセスが、当事者と支援者の対話的な関係性を構築する「対話の場」につながること、そして、その場を支援者側がどう活用するかによって、当事者主体の支援へと展開することが示された。

第5章では、「＜ずれ＞」を活用した当事者主体のソーシャルワーク支援のあり方について検討した。従来のソーシャルワークには「＜ずれ＞」を修正した方がよいという規範があるが、その発想を転換し、「＜ずれ＞」を積極的に活用するソーシャルワークを構想することが当事者主体の支援活動につながると結論づけた。

以上のことから、本論文は、博士（人間科学）の学位授与にふさわしい内容を備えていると判定する。